

中東とのきずな

⑭

心と技のメッセージ

パレスチナで音楽療法

ドキュメント 挑戦

パレスチナで紛争に巻き込まれて負ったトラウマ(心的外傷)から人々をどう救うか。非政府組織(NGO)日本国際ボランティアセンター(JVC)に所属する藤屋リカは中東和平を実現するうえで無視できないこの問題に取り組んでいる。

ガザ、ヨルダン川西岸に住むパレスチナ人の約半数が、程度の差はあれ心的外傷後ストレス障害(PTSD)を患っているとされる。イスラエル軍との衝突で撃たれた。家族が死んでいくのを目撃した。自分の家が軍に破壊された。そんな経験を経てトラウマを背負う例が少なくない。

対人関係がうまくいかず、学校に受け入れてもらえない子供もいる。そうした症状を改善させようと藤屋が取り組んでいる。



JVCなど支援を得て障害を持つ子供たちの音楽療法にあたる地元教師(ヨルダン川西岸・ベイトサフルで)

感情を表現、心の傷癒やす

るのが音楽療法と呼ばれる手法。「ピアノや鈴、カスタネットを演奏して感情表現することで心身をリラックスさせ、心の傷をいやすセラピーをする」という。

キリスト誕生の地、ヨルダン川西岸のベツレヘム近くのベイトサフルに施設を持つ米国系NGOフランシスカン・ライフ・センターと費用を折半して連携。パレスチナ人のカウンセラーや教師を育成している。最近、音楽療法に加え、話し聴く機能を回復するための言語療法も開始した。保健師の資格を持つ藤屋が健康面の改善度合いをチェックする。

二〇〇〇年のアルアクサ・インティファダ(対イスラエル蜂起)以来、パレスチナ人の生活は混乱の渦に巻き込まれた。連続テロに直面したイスラエルは自治開始以来例のない規模で軍事作戦を起した。

紛争の炎が燃え盛る中、子供たちへの教育支援も滞った。

JVCは〇二年になって、衝突で閉鎖されていた図書館を、子供が学習し、かつ遊べる集会場に

改修するプロジェクトを実施。長崎の市民団体などからも資金を提供してもらい地元の建築士が図面を作製した。域外からの資金に支えられ、パレスチナ人による自主的な復興ができた一例だ。

藤屋は翌〇三年、ベイトサフルにあるキャンプ場へ行った時に子供たちがみせた表情が忘れられない。参加者が増えすぎ、テントが足りなくなったので急ごしらえでビニールハウスをテント代わりに使った。簡素な設備だったが、子供らは声を張り上げて喜んだ。

無理もない。紛争の渦中で立ちこまっていた暮らしてきた自治区の子供たちはキャンプといえは「難民キャンプ」しか縁がなかった。レクリエーションのキャンプは初経験だ。大騒ぎになり、年長のリーダーを中心に自然の中で歌い踊り続けた。

興奮は日が暮れてもなかなか冷めない。途中で帰るよう言われてきた女子グループも帰宅を遅らせて、深夜に名残惜しそうに帰っていった。

パレスチナ情勢の行方はまだ不透明だが、藤屋の胸中には希望ものぞき始めているようにみえる。

敬称略
(国際部 中西俊裕)